

旅びと

——ペトロ岐部の一生

松永 伍一
平野 遼 絵



偕成社の創作文学

たび 旅 び と——ペトロ岐部^{き べ}の一生^{いつしよう}

NDC 913 偕成社 374p 21cm 1984年

発行 1984年11月 初版第1刷

著 者 まつ 松 なが 永 ご 伍 いち 一

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話(03)260-3221 振替 東京 5-1352番

印刷 新興印刷・小宮山印刷／製 本文 勇堂製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-720530-0

Printed in Japan

© Goichi MATSUNAGA, Ryo HIRANO 1984

旅びと——ペトロ岐部の一生

松永伍一著／平野遼絵



偕成社

旅
び
と
／
も
く
じ

一 わんぱく時代……………8

夜明けの鳥／豊後の殿さま／父たち
の船／村よ、さらば／天草の夕日

二 夢と祈りと……………67

オルガンのひびき／セミナーヨの
引越し／決意の日／父の死、それ
から／二人のマンショ／くらい足音

三 海をわたって……………131

国外追放／泳いで逃げる人／マカ
オにつく／にがいスープ／トマス
荒木という男／やまりの鳴く夜／
掟を破る



四 砂漠を歩く……………184

ゴアまで／誓いの別れ／砂あらし／
隊商の群れ／おおエルサレム／
ローマをめざす

五 祖国への道……………254

司祭になる／日本へかえろう／ふた
たびマカオ／アユタヤの山田長政／
ルパン島から／密入国成功／十
六年めの長崎

六 炎のなかに……………330

山のなかの細い道／みちのくの
吹雪／とらわれの夏／ひとつぶの麦

あとがき……………372





著者・松永 伍一（まつなが ごいち）

詩人・評論家。1930年、福岡県に生まれる。八女高校卒業後、村の中学生を8年間教え、1957年に上京、文筆生活に入る。著書に『日本農民詩史』（全5巻）『松永伍一著作集』（全6巻）『日本の子守唄』『わらべ歌』『油屋のジョン』『少年——良太の橋』『明日の空にむかって』『ひこ山のおに』『母たちの肖像』など多数がある。住所／東京都練馬区上石神井1-355

装画・平野 遼（ひらの りょう）

1925年、福岡県生まれ。自由美術家協会・主体美術協会会員などを経て、現在は無所属。ヨーロッパ・中央アジア・トルコなどを旅行し、成果を個展で発表。現代日本美術展・日本アンデパンダン展・安井賞展・明日への具象展出品。『平野遼素描集』などが刊行されている。住所／北九州市小倉北区黒原3-29-15

装丁デザイン・山本利一

旅 び と

—
ペ
ト
ロ
岐^き
部^べ
の
一^{いつ}
生^{しょう}



一 わんぱく時代

夜明けの鳥

あらしだった。

入り江^いにうちよせる波^{なみ}がうなりをたて、水しぶきは低い屋根の高さをこえていた。

「船は、しっかりつないだか。」

「いや、手もつけられん。」

「いのちのつぎにだいじなもんだぞ。」

「こまったことじゃのう。」

村の年よりと、若い男^{わか}の声^{こゑ}がきこえるが、すがたは見えない。

ときどき風の音にまじって「ア—ッ」という叫^{きけ}びが、夜の空に吸^すわれていく。

「屋根がとぶぞ—。」



「庭石をなわでしぱりつけてみる。」

「もう手おくれじゃ。」

となりの七平じいさんのもの悲しい声がしたかとおもうと、家のこわれる音がした。

「甚右衛門どの！」

びしょぬれのじいさん夫婦が、岐部甚右衛門の裏口で助けをもとめている。

甚右衛門はキリシタンで、洗礼名をロマンという、このあたりで名の知れた侍だ。かれは親切で、おもしろいやりがあつて、だからもたよりにされていた。侍だが、百姓や漁師たちとも仲がよかった。

「家が吹つとんでしもうた。」

七平じいさんは、ぬれた着物をぬいだ。

「早う着がえなせ。」

甚右衛門は、自分のふだん着をだした。

部屋はまっくらだ。

「今夜、生まれそうじゃ。」

甚右衛門は、はじめての子が元気で生まれるとよいが、とねがつている。それをきいて、「湯をわかさにゃあ」と、七平じいさんは、かまどに火をつけた。

風はひどくなっている。

かまどの火が、プチプチ音をたてる。部屋がぼーっと明るくなった。寝ているお里のすがたが、ぼんやりと七平じいさんの目にうつった。

「男の子じゃ。そうにきまつとる。」

じいさんが、かすかに笑った。

（そういえば、あの女のひとが、きつと男の子だといっていたな。）

甚右衛門は、そのときのことをおもいだした。

（神さま、心のきれいな子をおさずけください）と、祈った。

あらしのなかで、男の子が生まれた。

その赤ん坊に兵助と名づけた。父のロマンが、洗礼をさずけた。名はペトロ。

「よい名じゃ。」

じいさんも十字をきつて祈った。

天正十五（二五八七）年旧暦七月四日の、夜明けである。

三十五歳で、はじめて子をさずかったから、甚右衛門はよろこんだ。

（あらしをのりきつていけと、神さまがこの日をえらんでくださったのだ。）

しみじみ、そうおもった。

お里は洗礼名をマリアといった。

「聖母マリアさまも、あんなふうにしてイエスさまをおうみなされたんじゃない。ほんに……」
七平じいさんが、マリアさまのことをいいだしてくれたのが、甚右衛門にはうれしかった。

「ほうれ、息もつかせず泣いとるわ。」

「ゆうべのあらしといっしょじゃ。」

「そうじゃな。気をつよい人間になるぞい、この子は。」

甚右衛門は、窓のむこうの海を見た。あらしはどこかへ去ってしまつて、日がのぼろうとして
いる。

「家がこわれたかわりに、ペトロが生まれた。わしはな、ゆうべのあらしをにくむ気はないぞ。」
じいさんは、笑つた。

ばあさんは、まだねむつていて、ときどきいびきをかいている。

二人は茶をのんだ。

「鳥がもう目をさまして鳴いとる。」

「ええ声じゃの。」

赤ん坊は泣きやんだ。

しばらくして、甚右衛門が口をひらいた。

「バテレン（キリスト教の宣教師）追いだしのことじゃが……」

「太閤さまは、なに考えておいでかわからんのう」と、じいさんも心配顔だ。

それもそのはず、太閤秀吉がヘバテレン追放令^{ついほうれい}をだしたというので、クリシタンの多いこの国東半島でも、よくないうわさがひろがつていた。指導者である岐部甚右衛門も、どうしたらいいのか、まよっていた。

(自分たちの力で、なんとしてでも信仰を守らねばならない。)

つらい時代が、もう目の前にやってきているような予感がする。しかし、生まれたばかりの赤ん坊には、光がさしてほしいものだ^{いの}と祈らずにはおれない。

「ええこともある。」

七平じいさんは、いつでもくじけないで生きてきた人だった。

「そうありがたいものよ、の。」

甚右衛門は、いつになく目をかがやかせている。

豊後の殿さま

フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教をつたえたのは、天文十八（一五四九）年のことだ。

豊後（いまの大分県）の殿さまの大友宗麟は、それをきいて、さつそくザビエルを府内（いまの大分市）にまねいた。そして、自由にキリストの教えをひろめなさい、といった。ポルトガルの国

王にも、「パードレ（神父）をよこしてください」と、手紙も書いたし、外国の船が港に出入りすることもゆるした。

「ブongoノクニ、タイヘンヨイトコロ」と、パードレたちも、口をそろえてほめた。教会や病院も、つぎつぎにできた。

キリシタンがふえた。

宗麟は、それでもポルトガルと貿易してもうけることを考えていた。鉄砲もほしかった。それが先だから、自分がキリストの教えを守るようになるまでには、長い月日がかかった。

九州では肥前（いまの長崎県）の大村純忠が、キリシタンになって、長崎でもうけていた。それを知って宗麟も、「よし、わしも……」と決心した。

洗礼名は、フランシスコ・ザビエルと同じく、フランシスコとつけてもらった。それからキリシタンがつぎつぎにふえていき、豊後だけで一万人をこえた。

「殿さまがキリシタンになられた」ときいて、お寺などを打ちこわしたりするものもでてきた。それに反対する坊さんたちは、このあたらしい信仰をにくんだ。おたがいの対立もはげしくなっていた。

天正八（一五八〇）年秋のことだ。

宗麟のところに、パードレの監督という、巡察師のバリニャーノがやってきた。殿さまは、とてもきげんがよく、ごちそうをだしてまかない、バリニャーノからもらったベネツアのうつく

しいガラス器きに、さつそくお酒をついでのんだ。

「そなたは、島原半島しまばらはんとうの有馬ありまに、神学校しんがっこうをつくられるそうじゃが。」

通訳つうやくが、宗麟そうりんの言葉をつたえた。

「もう、ここまでその話はつたわっておりますか」とバリニヤーノはいい、じつと目をのぞきこむようにして、「秋のうちにひらきます」と、つぶけた。

「そりや、ええことじゃ。」

「はじめてのことですから、うまくいくかどうかわかりませんが……」

「うまくいくとも。がんばりなされ。」

丸坊主まるぼうずの頭を自分の手でなでながら、宗麟そうりんは満足まんぞくそうに笑わらった。

「わたくしは、日本の子どもの力を信じておりますから……」

「信じているとは？」

目と目が合っていた。

「ちゃんと勉強べんきょうさせると、ヨーロッパの子どもたちに負けないぐらい、よくできるようになると信じているのです。」

なんともうなずいてから、宗麟そうりんは、「そなたにたのみたいことがある」といった。

「日向ひめろが（いまの宮崎県みやざきけん）の伊東家いとうけのせがれをあずかつておるが、親をうしのうてかわいそうでのう。その子を有馬ありまの神学校しんがっこうに入いれてはもらえまいか。」

バリニヤーノは、口もとをほころばせた。

「ひきうけました。その子の名は？」

「マンシヨ。ほんのわずかに血をひく子でな。」

話はうまくまとまった。

その一週間あとに、マンシヨ伊東は、よれよれの着物をぬがされ、さつぱりと着がえて有馬へと旅だった。

これが、〈天正の少年使節〉の代表としてローマにいった少年である。宗麟は、かれにローマ法王への手紙をもたせてやった。

宗麟は、マンシヨ伊東がおみやげにどんな話をもちかえるか、それをたのしみに待っていたが、少年たちが帰国する三年まえに死んでしまった。

甚右衛門は、七平じいさんと話しながら、たったいちどだけ会ったことのある宗麟のことを、なつかしくおもいだす。

あれはクリスマスの日だった。

「浦辺からキリシタンどもを十人つれてこい」との命令で、岐部城主の岐部左近大夫は甚右衛門などをひきつれて、はるばる一日がかりで府内にいった。

小舟であった。風がよわくてたすかった。